

# 伊豆下田の幕末史

松平忠志（応化会）

特急“踊り子”号に乗ると、東京駅を出てから3時間足らずで伊豆下田駅に着く。伊豆の下田は、幕末開港の歴史と海岸美がセールスポイントだ。しかし開港した期間は僅か5年間にすぎなかった。



なお有名な“唐人おきちの物語”は、ほぼ完全なフィクションである。町娘が恋人と別れさせられ、お国のために泣く泣く人身御供になったという話だ。戦時中に、愛国心を鼓舞するための絶好のシナリオに仕立て上げられ、いまだにお吉の墓は観光スポットだ。歴史は権力者に都合よく書かれるという典型のような話だ。

さて1853年にアメリカ合衆国ペリー提督の率いる黒船が浦賀に来航し、鎖国日本は太平の夢を破られた。それから僅か14年で徳川幕府は完全に崩壊し（大政奉還・王政復古）、明治新政府が成立した。

そして88年後の1941年に、日本は米国に戦いを挑み、完膚なきまでに叩きのめされ降伏した。ペリー来航から、僅か92年後のことだった（1945）。人生100年時代、ほんの少し昔のことなのだ。

下田にはアメリカ合衆国の総領事館となった玉泉寺がある。我が国に出来た最初の外国公館なのだ。私なりに時系列的に「幕末の下田開港史」を紹介したい。

当時アメリカ合衆国（1776年に独立宣言）は世界最大の捕鯨大国だった。18世紀の初頭に東海岸で興ったアメリカ式捕鯨は、マッコウクジラを主な対象とする漁法であるが、丁度最盛期を迎えていた。1846年における捕鯨船の国籍は、アメリカ合衆国736隻、その他の国の船230隻で、年間1万頭以上の鯨を捕獲したという。そして鯨蠟や鯨油が採取され、燃料や照明に使われた。鯨蠟は蠟燭に加工されて、ヨーロッパ向けの重要な輸出品だった。

鯨はやがて減少する。漁場は鯨を求めてカリブ海から大西洋、インド洋、更には太平洋へと広がり、遂に日本近海に達していた。米国にとって、補給基地を確保することは重要な国策になっていた。

また合衆国は独立後、西へ西へと領土を拡大していたが、遂にカリフォルニアを併合した（1848年）。新興海洋国家にとって、日本は隣国になっていた。頑なに祖法を守り、国を閉ざしている日本に国を開かせ、国際的ルールに従わせる必要がある。難破船員の救助、捕鯨船の補給基地、自由貿易、自由往来などは国際ルールだ。一方、西欧列強は、頑なに鎖国を続ける日本との交渉には手を焼いていた。

アメリカ合衆国は他国にさきがけて日本を開国させるべく、ペリー提督を派遣したのだ。

一方、今の伊豆下田は小さな観光地のひとつに過ぎないが、江戸時代は物流と江戸防衛の要衝だった。幕末には江戸と大阪間の回船の風待ち港であり、避難港として繁栄していた。

戸数は約800戸で、東海道の藤沢宿と同規模、海の東海道の宿場町と言えるだろう。陸路では非常に不便だが、海路では江戸と直結していた。

なお江戸時代の初期、1616（元和元）年にも下田奉行所が置かれたが、1720（享保3）年に浦賀に移されている。この間は江戸湾に入る船はすべて、下田で検査された。物流の把握だけでなく、武器の流入を警戒したのだ。江戸幕府の支配が盤石となったために、防衛拠点を、不便な下田から浦賀に移したのだ。

幕末になって、外国船が出没するようになったが、下田奉行所は復活したり廃止されたりしている。

幕府が警戒していた証拠だが、対応が場当たりのだった証拠でもある。

1853（嘉永6）年、ペリーは、武力で威嚇してでも、日本を開国させるべく不退転の決意で来航したのである。彼は十分な予備調査の上で、“力の差を見せつけること”が不可欠だと確信していた。長崎ではなく、浦賀に来た。許可なく横浜へ、品川沖へも入った。戻れと要求されても、調査を続けたのも、予定の行動だった。

そしてご存知の通り、幕府はペリーの威嚇外交に屈するしかなかった。庶民は、ペリーが戦争を仕掛ける気はないことを感じ取って、見物を楽しんでいたようだ。

1854（安政元）年、ペリーが第二次来航し、日米和親条約が締結された。下田と函館を開港し、食糧や燃料の補給。半径10マイルの自由行動が許可された。ペリーは下田港を調査し、満足して帰った。この時、吉田松陰が密航に失敗して捕縛された。

この年、下田に仮奉行所が設置された。日英和親条約と日露和親条約も締結された。

開港の準備もままならないこの年の暮れに2つの巨大地震が日本列島を襲った。

まず12月23日、安政東海地震 (M 8.4) が起こった。駿河湾付近を震源とし、大津波を伴う海溝型巨大地震だった。下田の町はこの時の巨大津波で875戸中841戸が流され廃墟と化した。

丁度この時、プチャーチン提督が率いるロシア軍艦 ディアナ号が来航していたが、下田湾内で大津波にあい、木の葉のように揉まれ、大破、座礁した。

そして僅か32時間後(12月24日)には安政南海地震 (M 8.4) が発生した。これも海溝型巨大地震だった。西日本の被害は大きく、大阪まで津波が押し寄せている。

なおプチャーチンは日本側の支援で、修理のためディアナ号を西伊豆の戸田港へ回航したが、途中で嵐に逢い沈没。後に、戸田で作った小型船で帰国した。プチャーチンは日本の支援に感謝し、以降は親日家となったのだが、津波の直後からの復興の素早さには驚嘆したと言う。

1855 (安政 2) 年。下田奉行所設置。

この年も大地震があった。10月22日。江戸直下型地震 (M 6.9) である。江戸の埋立地に被害が集中した。譜代大名の上屋敷が、埋立地に集中していたため、幕府の政治中枢が大打撃を受けた。皇居外苑や丸の内周辺に当たる。また本所・深川などの埋立地が壊滅して大火となり、7000人以上が死んだ。

1856 (安政 3) 年。下田の玉泉寺に米国領事館を開設し、日米和親条約に基づいて、ハリスとヒュースケンが着任した。ハリスもまた、西欧列強に先んじて、彼らの規範となるような日米修好通商条約を締結することに意欲を燃やしていた。頑迷な日本を開国させる一番乗りの栄誉を歴史に残せるのだ。

海路では便利な下田も、陸路はいかにも不便な所だ。交渉は難航した。江戸幕府との交渉は、役人が陸路で往復する必要があるので進まず。また米国船が来ないので、本国との直接連絡はできず。外国船の入港もほとんどなかった。ハリスは島流しにされたような気分だったようだ。

偶に外国船が入ると、イザコザがあった。船員にとっては、おとぎの国に来た

ようなものだ。このチャンスに何か記念になるものを手に入れたい。身振り手振りの売買交渉は、強奪と思われる。土足で民家に入ったり、酔っぱらって騒ぐ、など。逆に船員からは、住民がぞろぞろ付いて来るので散歩もできないなどの苦情が出る。

両者が交渉して、「罰として全員上陸禁止」、あるいは「船員の歩行の妨害禁止」などと決めた。

横浜開港の後の大混乱、攘夷運動、殺人や焼き討ちに比べれば穏やかなものだった。

和親条約に基づいて下田と函館の2港だけを開くという「限定開国」は、日本社会への影響は穏やかで、幕府の外交交渉はまずまず成功だったようだ。相互理解も進んでいった。なおこの安政年間には地震・津波・台風などの巨大災害が相次いだ時で、自然災害が幕府の崩壊を早めたとの説もあるほどだ。しかし幕府の権威はまだ何とか保たれていた。

しかしアメリカの代表ハリスとしては、全くの当て外れで、大いに不満だった。特に下田が貿易港には向かないことは、骨身に滲みていただろう。

なおこの年 8月25日（西暦1856年9月23日）、江戸は大暴風雨に見舞われた（江戸湾の西を巨大台風が通過）。戌の刻（午後8時）ごろから雷を伴った風雨が激しくなった。大石が飛び、大木が倒れ、多くの家屋が飛んだ。600石積み舟が川口に吹き上げられ、死者は10万余人（近世史略）。震災に続く前代未聞の大風災に、人々は不安におののいた。

1857（安政4）年。ハリスが、下田から陸路、駕籠で天城を越えて江戸へ。幕府に開国の必要性を説いた。帰路は船旅。

1858（安政5）年。日米修好通商条約が締結された。

1859（安政6）年。横浜を開いて下田を閉ざしたため、下田奉行所は廃止された。下田はまた、太平の眠りに戻ったのだろう。下田の米国領事館は廃止され、江戸麻布善福寺に米国公使館が開設される。

安政の大獄があった。

この年、ペンシルベニア州で、油井から、本格的に原油を汲み出すことに成功した。これは蠟燭から、灯油ランプへの、照明の大転換をもたらした。捕鯨業は以後、急速に衰退することになる。

1860（万延元）年。通訳ヒュースケンが暗殺される。

1862（文久2）年。ハリス帰米。なおアメリカの南北戦争は1861～1865である。捕鯨業も先細りとなり、アメリカは外交どころではなくなった。

なお下田を閉ざして、代わりに横浜を開いてからは、英・露・仏・蘭・独など、諸外国との修好通商条約が結ばれ、本格的に貿易が始まった。しかし国内には攘夷論が根強く、日米修好通商条約は、朝廷の勅許も得られないままに、外圧に屈して結ばざるをえなかった。朝廷は不満の勅条を下したが、それでも幕府は諸外国と締結せざるをえなかった。幕府の権威は失墜した。

また外国貿易の副作用も顕著で急激だった。

鎖国中、日本では金：銀の価格比は5：1だったが、海外では15：1だった。開国するや、たちまちにして大判、小判、金が海外に流出してしまった。そして急激なインフレとなり、諸物価が高騰した。世情は騒然となり、尊王攘夷派浪士による要人の暗殺、外国大使館や外国人に対する襲撃事件などの騒乱が続いた。天然痘・コレラなどの伝染病が流行した。

公武合体のシンボルとして、和の宮降嫁が執り行われたが朝廷の攘夷の姿勢は変わらず、孝明天皇は攘夷を祈願するため、賀茂神社に行幸した。将軍家茂はこれに付き従わざるを得ず、幕府は「攘夷」を決断せざるを得なくなった。政権運営は支離滅裂となり、完全に統治能力を失ってしまった。

薩摩と長州による外国船砲撃と外国海軍による徹底的な報復攻撃を受けて、ようやく「攘夷論」は終息した。第二次長州征伐の途中で将軍家茂が死去した。最後の将軍慶喜も幕府の瓦解を止めることはできなかった。

なお英国が新政府側を支援し、フランスが幕府側を支援した。アメリカは南北戦争で手一杯だった。

さてテレビでもネットでも、“外国人が驚いた日本の良いところ”と言った話題で賑わっているが、本来は賛否両論を併記すべきだ。幕末の外国人による旅行記にも、賛否、さまざまな記録がある。例えば、

「日本の子供は清潔で健康的だ。」という意見もあれば、「日本の子供には眼病と皮膚病が多い。栄養が偏っているからだろう。」との意見もある。多分、両論ともに正しいのだろう。

以下、いくつかトピックスを紹介する。

- 反射炉：1853（嘉永6）年。葦山代官 江川英龍が下田郊外に反射炉を建設した。しかし、同年にペリーが浦賀へ来航したため、外国人の目に触れないよう、葦山に移設した。復元すれば、葦山より古い文化遺産になるはずであるが、残念ながら、バス停に名を残すのみである。

- 蹄鉄につき、示唆に富む記録がある。：

ヒュースケンが、来航中のポーツマス号の鍛冶工に作らせた蹄鉄は、下田の住人にセンセーションを巻き起こした。日本では馬に草鞋を履かせていたが、直ぐにすり減る。1時間ももたなかった。

ところが馬を借りて行った人がいた。直ぐに返したが、しばらくすると蹄鉄は下田に大流行した。日本人は良いと判ると直ぐに取り入れる融通性がある、という。

蹄鉄はまず下田に紹介されたのである。

なお、異説もある。

大老井伊直弼がハリスの乗馬に関心をもった。特に蹄鉄という便利なものがあることを知るや、従者にその構造を調べさせ、すぐに、すべての馬に蹄鉄をうたせた。ハリスは驚き、日本人は有用なことが分かると、外国の方式を敏速に取り入れる、と確信したという。ロバート・フォーチュン著、三宅馨訳「幕末日本探訪記」、講談社、1997. p203。

ところで観光目的で、最初に世界一周した人はシュリーマンだと言う。彼はドイツの貿易商で、トロイの遺跡を発見したことで有名な考古学者でもあるが、旅の途中で日本を訪れている。横浜では、14代将軍家茂の長州征伐(1865)の行列を見物しているが、“将軍も他の馬と同様、ワラのサンダルを履いた馬に乗っている。”と記録している。下田に蹄鉄が入ってから9年も経っているのに、蹄鉄はまだ使われていなかった。

一般庶民や小さい組織は柔軟で、新規なものを直ぐ取り入れるが、組織が巨大になるほど、保守的・硬直的になり、旧来の慣習を変えることが出来ないのだ。今の日本にも通じる問題だが、将軍の行列を想像すると、風刺劇のようだ。

- 銭湯：船員たちの受けた、最大のカルチャーショックは銭湯だった。

“老若男女が素っ裸で風呂に入るとは、何たる野蛮な奴らだ。”という意見と、  
“庶民階級が毎日風呂に入り、元気な若い男女が裸でも事件が起こらない。清潔好きで、道徳心を持つ文明国だ。”と意見が分かれた。

- ハリスの日本に対する評価：下田は気候も良いし、景色も美しい。住民は貧しいが、楽しく暮らしていて、食べ物や着る物に困ってはいない。家は清潔で日当たりは良い。世界中のどこにも、下田の人達より良い生活を送っている労働者階級はいないだろう、と言う。

なお僅か 2 年前の大津波で下田の町は廃墟と化した直後だ。庶民はバラック建てだったはずだが・・・・

江戸の庶民もシンプルライフだった。所有物がなければ、火事も地震も津波も怖くない。シンプルライフは災害にも強かったようだ。

#### 付記

私は敗戦の翌年に武蔵野市から伊豆の下田に戦後疎開し、旧制中学の3年に編入した。新制度に移行し、卒業は下田北高（現在は下田高校）である。伊豆下田は第二の故郷だ。

(2018.4.10 記)